



民族性から土着性へ：ソロモン諸島紛争におけるイサタンブ解放運動の一側面

石森，大知

(Citation)

国際文化学研究：神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 53:1*-27*

(Issue Date)

2019-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011955>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011955>



民族性から土着性へ

ソロモン諸島紛争におけるイサタンブ解放運動の一側面

石 森 大 知

1. はじめに

ソロモン諸島では1998年から2003年までの間、エスニック・テンション（Ethnic Tension）あるいはガダルカナル・クライシス（Guadalcanal Crisis）などと呼ばれる紛争を経験した（以下、ガダルカナル紛争と呼ぶ）。紛争はソロモン諸島の首都ホニアラが位置するガダルカナル島を舞台として展開し、ガダルカナル島側の民兵組織イサタンブ解放運動¹（IFM: Isatabu Freedom Movement）と、マライタ島側の民兵組織マライタ・イーグル・フォース（MEF: Malaita Eagle Force）の間で武力衝突が起こった。マライタ島はガダルカナル島の北東約100キロメートルに位置しており、20世紀後半以降、同島から数多くの人々がガダルカナル島に渡り、おもにホニアラ周辺およびその郊外に居住してきた。紛争拡大のきっかけはIFMがマライタ島からの移住者を暴力的に排斥したことにあり、結果的に約3万5千人もの国内避難民を生んだとされる [Allen 2012:164]。

本稿では、ガダルカナル紛争の先行研究を批判的に検討するとともに、とくにIFMの主張に注目し、彼らが土地との関係を正当化する論理について考察を行う。先行研究においてIFMはイギリス植民地時代に起こったモロ運動²（Moro Movement）の影響を受けていることが度々指摘されてきた [関根 2002; Fraenkel 2004; Moore 2004; Kabutaulaka 2008:110-111; 石森 2016:192-197]。モロ運動とは伝統文化、すなわちソロモン諸島の共通語であるピジン語でいうカストム（*kastom*）に回帰することを主張し、カストムに基づく生活様式を実践しながらガダルカナル島民の経済的な自立を訴えた運動である [Davenport and Coker 1967]。モロ運動の発祥地はガダルカナル島南部のウ

エザーコースト地域であり、そこは IFM の主要リーダーたちの出身地でもあった³ [Allen 2013:107]。そして先行研究においては、IFM はモロ運動と同様にカスタム回帰主義的であると論じられてきた [関根 2002; Fraenkel 2004; Moore 2004]。このような議論の背景として、とくに 1980 年代以降のメラネシアにおける社会運動論の理論的な流れを指摘できる。というのも、既存の社会運動論に基づけば、メラネシアの人々はカスタムを集団統合のシンボルとして客体化し、カスタムに基づく彼らのやり方や法を運動の中心に置きつつ、外部勢力に対抗してきたと論じられてきたからである⁴ [Keesing 1992; Otto 1992]。

たしかに、IFM はモロ運動の影響を受けていると考えられる。筆者はガダルカナル島北東部の東タシンボコ地域においてフィールドワーク調査⁵を行ってきたが、かつて IFM とかかわった者の中には、モロ運動に感化された者もいるからである。加えて、紛争状況下の同地域において一時的にせよ、モロ運動を象徴する伝統的衣装の着用や諸儀礼の実践が行われていたことも明らかになっている [石森 2016:192-197]。また、IFM はイサタンブ (Isatabu) という名を自ら掲げているが、イサタンブとはモロ運動においてガダルカナルというスペイン起源の地名に代わって使用されるようになった語であり自分たちの土地の重要性を表している。イサタンブの名を語ることはモロ運動に共感していることと同義であり、(イサタンブを自らの名称に掲げる) IFM はモロ運動の影響を自ら宣言しているといえる⁶。さらにいえば、モロ運動の創始者であるペリセ・モロの息子も IFM に参加していたという [Moore 2004:106-107]。

しかし、IFM がモロ運動の影響を受けていることと、カスタム回帰主義的であることはまた別の問題である。より正確に言えば、たとえ IFM がモロ運動から影響を受けて何かに取り組んだとしても、当事者がその取り組みをカスタムと認識するかどうかは別途検討を要する。東タシンボコにおける筆者の調査中、IFM 自らが発行するニュースレターを目にする機会があった。後述するが、この媒体にはカスタム回帰主義的な記述は希薄であり、逆にモロ運動に模したカスタム回帰の動きを批判する内容すら記されている。一方で、自分た

ちと土地との関係について、明らかにモロ運動におけるイサタンブに対する語りと同様の表現を読み取ることができる。ここで本稿の結論の一部を先取りすれば、IFMはガダルカナル島民と土地との関係について語るさい、その関係を自分たちのカスタムによって正当化するという方法を選択していない。その代わりに彼らが強調するのは、同時代の世界の先住民と共有し得る土地との関係性である。それでは、IFMにおいてやや普遍的なものとして想起される人々と土地とのあり方とはいったい何であろうか。

以上のような問題意識のもと、本稿ではIFMの主張をおもに上述のニュースレターに基づいて明らかにし、モロ運動との連続性について考察を行う。以下、本節に続く第2節では、まずガダルカナル紛争の流れを簡単にまとめ、第3節では同紛争に関する先行研究を批判的に検討する。第4節ではIFMとモロ運動のかかわりについて、同ニュースレターの資料の提示・分析を行う。そして最終的に、IFMの主張にみられる土地との関係性について考察を行うとともに、現代社会における土着性に基づく移民者の排斥という視点からガダルカナル紛争の有する特徴を明らかにする。

2. ガダルカナル紛争の概要

ソロモン諸島は16世紀中頃にスペイン人探検家に「発見」された後、19世紀末にイギリスの植民地となった。第二次世界大戦を経てガダルカナル島北部のホニアラで首都建設が開始され、賃金労働を求める人々が集まった。なかでも同諸島最大の人口を誇るマライタ島から大量の移住者がガダルカナル島に流入し、労働者として生活を始めた[Bellam 1970; 関根 2002:70]。1952年、ホニアラは正式に植民地の首都となったが、それ以降もマライタ島からの移住者の多くは自分たちの島に帰還しなかった。彼らはホニアラやその近郊の政府地を一時的に借り受けるか、あるいは不法に占拠して居住を続けたのである。さらに1978年の国家独立後、マライタ島民が居住するエリアはホニアラ市内だけでなく、ガダルカナル島民が伝統的に所有してきた慣習地⁷にまで拡大した。彼らはガダルカナル島の土地所有者と個別に交渉を行い、現金や財を支払

うことで慣習地を借用ないし購入したのである〔宮内 2011:238-240〕。1990年代後半にはマライタ人⁸はホニアラ人口の45パーセントを占めるようになり、多数の小集落を形成するに至る〔SIG 2000; 石森 2013:103-104〕。

一方で、先住者であるガダルカナル島民にとって、マライタ人が増え続ける状況は望ましいとはいえなかった。マライタ人のなかには仕事もせず都市でぶらつく若者も少なからずおり、暴力や犯罪に手を染める者、ガダルカナル島民に対する礼節を欠く者などもいた。独立後の20年間、マライタ人の若者がガダルカナル島民を殺害、強姦する事件も相次いで発生し、ガダルカナル島民の間でマライタ人に対する脅威や敵対意識が芽生えていた〔Kabutaulaka 2001〕。後にIFMと呼ばれるガダルカナル島民の武装集団が出現したのは、このような社会状況においてである〔石森 2016:174-175〕。

イサタンブ解放運動（IFM）は、文字通り「イサタンブ（ガダルカナル島）の解放のために戦う」ことを目的として結成された。イサタンブとは、ガダルカナル島南部の現地語で狭義にはガダルカナル島およびその土地を意味するが、同島の人間・動植物を始め、自然現象、祖先霊や精霊などの霊的な存在およびそれらと人間との精神的なつながりにまで広がる概念である。IFMの認識では、外部勢力がガダルカナル島の土地で不法に居住し、同島の伝統文化を尊重せず、同島の人々に危害を加え続けている。また、政府はガダルカナル島に首都を建設し、ガダルカナル島で大規模な経済開発を行う一方で、その利益をソロモン諸島全体に還元しガダルカナル島民に対して適切に配分しようとしていない。IFMが主張する「解放のために戦う」とは、現在のガダルカナル島は外部勢力に支配される暗黒時代にあり、そこからイサタンブを解放し、自分たちの将来にわたる自由な移動・思考・行動の実現のために戦うことを意味している〔IFM 2000d; 石森 2016:177-178〕。

さらに、IFMの要求について、紛争状況下の1999年6月に締結された「ホニアラ和平協定」に基づいて確認しておく。①ホニアラが首都として発展する過程で譲渡された土地、およびマライタ人によって不法に取得された土地をガダルカナル島民に返還すること。②マライタ人によって殺害されたガダルカナ

ル島民に対する賠償金を支払うこと。③ガダルカナル州およびその他の州により強い自治権を付与し、土地の使用・売買の管理、ある州で得た利益の当該州への還元、他州からガダルカナル州への人口移動の制限を行うこと、という3点である。そしてこれらとともに同和平協定で強調されたのは、マライタ人のマライタ島への帰還である。このように IFM の要求として、ガダルカナル島の土地から外部者を追い出し、土地を外部者から取り返すこと、すなわち「土地を以前の状態に戻すこと」が重要視されているといえる。

1999 年以降、IFM はガダルカナル島北部に点在するマライタ人の小集落や居住区を襲撃し、住居や家財を強奪および破壊するとともに、島からの退去を命じるという排斥活動を繰り返した。政府発表によると、ガダルカナル島全域で避難民の総数は 3 万 5309 人に上り、同島に居住する約 11 万人の約 3 分の 1 が避難民となった [SIG 2000]。しかし、IFM による一方的な暴力に対して、マライタ島民は黙っていたわけではない。2000 年 1 月、マライタ州の州都アウキにおいて覆面した集団が警察の兵器保管庫を襲撃し、高性能武器と弾薬を強奪した。ソロモン諸島警察の大多数はマライタ島民から構成されているが、彼らの一部がこの略奪行為に加担したとされる [Fraenkel 2004:82]。武装化に成功した集団はホニアラに向かい、他の集団と合流を果たした後、「マライタ・イーグル・フォース (MEF)」を名乗った。MEF は、IFM によって暴力的に奪取された土地や財産の奪還を目指し、激しい戦闘を開始した [Braithwaite et al. 2010:27-28]。

その後、おもにオーストラリアの仲裁で新たな和平協定が結ばれたものの、IFM および MEF とともに内部分裂が発生したことで、紛争はより複雑化・細分化して継続した。最終的に、泥沼化した状態に終止符を打ったのは、オーストラリアを中心とするオセアニア域内諸国の直接的な介入であった。2003 年 7 月、ソロモン諸島総督からの正式な要請に応え、オーストラリアとニュージーランドを始めフィジー、パプアニューギニア、トンガなど太平洋諸島フォーラムに加盟する国々が介入部隊を合同で編成し、ソロモン諸島に到来した。ソロモン諸島地域支援ミッション (RAMSI: Regional Assistance Mission for

Solomon Islands）と命名されたこの部隊は、圧倒的な軍事力でもって迅速に武装解除を進め、同諸島全域で武器を回収した。また、同部隊は分裂した IFM と MEF の残党など各地で抵抗を続ける武装勢力を投降させていった。こうして約5年間続いた紛争は終結を迎えることとなった [Braithwaite et al. 2010:51-55; 石森 2016:176-177]。

3. 先行研究の検討—モロ運動と IFM のつながり

本稿の冒頭で述べた通り、ガダルカナル紛争の先行研究において IFM は植民地時代に生じたモロ運動の延長線上に位置付けられてきた。本節ではモロ運動について簡単に説明した後で、先行研究を批判的に検討する。

モロ運動とは、イサタンブ（ガダルカナル島）の歴史やカストムの理解・実践を通して日常生活を再構築することで、現状の改善を狙った社会運動である。この運動は、カストムへの強い関心がみられることから、研究者によってカストム運動 (*kastom movement*)、カストム回帰運動 (*back to kastom movement*) などと形容され、メラネシアにおける類似の社会運動とともに、カストムに基づく集団統合・権利要求などの側面が注目されてきた [Kabutaulaka 1998:17; Moore 2002:97]。

運動の創始者はウェザーコーストのマカルカ村出身のペリセ・モロという男性であり、伝統的な霊的存在から啓示を受けた彼は、その啓示に従ってカストムに基づいて生きることを訴えた [石森 2016:193]。モロは、次の三段階から成る教えに基づいて運動を展開した。①イサタンブを創造したのは創造主イロンガリ (Ironggali) であり、その土地を統治するための法をもたらししたものイロンガリである。②イロンガリは島をつくった後で人間、すなわちイサタンブ島民を創造し、ツイマウリという男性をイサタンブのパラマウント・チーフとした。こうしてツイマウリはイサタンブの土地や海の所有者となった。現在のイサタンブ島民はすべてツイマウリの子孫である。③モロはツイマウリを正式に継承するパラマウント・チーフであり、カストムに訴えることでイサタンブの土地に関する植民地政府の法に挑戦する、というものである [Davenport

and Coker1967:142-147]。

モロおよびモロ運動の参加者にとって、創造主イロンガリがつくりだしたイサタンブの土地およびその他の資源はツイマウリを継ぐモロの権限下にあり、外部勢力がそれらを所有・管理することは認められない。モロは次のようにも述べている。「我々（イサタンブ島民）はこの島、島を流れる川、島をとりまく海、それらに生息するあらゆる生物を所有している。イサタンブに埋蔵されている金、銀、鉄などの鉱物資源についても同様である」[Davenport and Coker 1967:144; 関根 2002:80]。モロ運動が起こった当時、第二次世界大戦の混乱から一段落する一方で、植民地政府、キリスト教、西洋文化、現金経済などの影響力が否応なく拡大、浸透していた。このような状況下、モロ運動は、カスタムを基盤にした日常生活およびアイデンティティを構築することで、西洋人に対抗したのである [Davenport and Coker 1967; 関根 2002:78-79; Moore 2004:97]。

モロ運動の発生から約40年が経過した1990年代後半になり、モロ運動あるいはイサタンブの名が再びガダルカナル島民の間で広く想起されることとなる。ガダルカナル紛争におけるIFMの登場である。以下、ガダルカナル紛争の先行研究においてIFMはモロ運動との関連でどのように論じられたのか確認する。

関根によれば、IFMがカスタム⁹を持ち出し、カスタムを重要視する背景にはモロ運動の存在があるという。彼は「イロンガリ以来のこの土地やその他の自然資源はすべてその後継者たるモロの権限下にあり、これらの資源が島外者によって所有されたり、コントロールされる事態は到底認められない」とし、「そのような行為はあくまでもイサタンブ島民だけに許される」という考え方を「モロイズム」と呼ぶことを提唱する。そしてIFMにおける「モロイズム」の影響を示すとともに [関根 2002:78-79]、「IFMは、ガダルカナル島における経済開発や賃金労働に積極的に参加するために「カスタム」に目を向け、これまでガダルカナル島民からそのような経済機会を奪ってきたマライタ人を「カスタム」を用いて排斥する [関根 2002:81]」と主張している。すなわち、関根はカ

ストムというイデオロギーのもつ影響力、そしてそれがモロ運動から IFM へと継承されていることを示唆している。

ムーアもほぼ同様の視点から IFM とモロ運動の関係を考察している。ムーアによれば、かつてモロ運動で主張されたカスタムはきわめて強いイデオロギーを帯びており、植民地政府および西洋人に対する異議申し立ての力をもつものであった。そのカスタムは前植民地時代の文化を反映したものではなく、ガダルカナル島民がここ約 100 年間に経験した諸事象が統合されたものであったという。すなわち、ムーアはモロ運動のカスタムは客観的・歴史的事実として前植民地時代の生活様式の復活ではなく、多分に西洋人を意識して対抗的に客体化されたものであることを認めつつも、「抵抗の一形態としてのカスタムの復興」の力強さを繰り返し強調する。そして 1978 年の国家独立を経た後もカスタムの復興に基づく抵抗運動の歴史が継承されていること、すなわちカスタム回帰主義運動としてのモロ運動から IFM へのつながりがみられることを主張するのである [Moore 2004:93-98]。

また、フランケルはカスタムが象徴的なシンボルというよりも、より具体的かつ政治的な手段であるという側面に注目しようとする。フランケルが著した書籍のタイトルは『慣習の操作 (*Manipulation of Custom*)』 [Fraenkel 2004] であり、伝統文化の意図的・操作的な客体化が IFM という運動の原動力となっていることを描き出す。フランケルはモロ運動がアクティブに展開した 1950 年代においても「タシンボコの人々のもっとも深刻な恐れは、マライタ人の移民に関することである」と土地調査を行った行政官が記述していること [Allan 1989:76] を引き合いに出し、モロ運動の事例から現在に至るまでガダルカナル島民はマライタ島からの移住者に対する恐れや脅威があることを指摘する。そしてモロ運動におけるカスタム回帰主義は以前の状態に戻すための宗教的・象徴的な手段というよりも、自治の獲得という政治的な手段と強く結びついていたとする。その上で、IFM はモロ運動を継承しカスタムを意図的・操作的に復興させることで、政治的・法的な地位を得ようとする運動であると主張している [Fraenkel 2004:19-37]。

以上の通り、先行研究において各々の論点に微妙な相違はみられるものの、IFMをモロ運動の延長線上に位置づける点、そしてとくにそのカスタム回帰主義に注目するという点は共通している。加えて、これらの研究ではメラネシアの人々はカスタムに基づいて集団的結束をはかり、政治的要求を行うという、既存のメラネシアの社会運動論に定型的にみられる視点 [Kabutaulaka 1998: 17; Fraenkel 2004] が継承され、共有されているといえるだろう。以下では、このような先行研究を踏まえた上で、IFM自らが発行するニュースレターに基づいて検討を進める。

4. 『イサタンブ・タヴリ』にみる IFM の主張

4-1. カスタムの不在

本節では『イサタンブ・タヴリ』¹⁰—イサタンブ解放運動ニュースレター (*ISATABU TAVULI: The Isatabu Freedom Movement Newsletter*)』（以下、便宜的に『タヴリ』と呼ぶ）を中心に IFM の主張を取り上げる。

まず、『タヴリ』が刊行されるに至った経緯についてである。IFMをめぐっては、紛争の発生直後からおもに国内外のメディアによって無知・無秩序・犯罪的・破壊的・時代錯誤的など否定的なステレオタイプで形容されてきた¹¹。これに対して IFM は自らが他者によって一方的に語られることに強い不信感とフラストレーションを感じ、「国内外を問わず各種メディアは過去 14 ヶ月の間、陳腐な決まり文句でもって IFM を悪魔化し、非人間化し、犯罪者的な武装集団に貶めてきた」と強い口調でその状況を批判している [IFM 2000a]。IFM によれば、「既存の情報は二次資料、もしくは噂、嘘、伝聞に過ぎず、自分たちが一度も出会ったことがない連中が自分たちのことを浅はかに記述しているに過ぎない」[IFM 2000a]。そのような状況を打破し、「IFM の組織とメンバー自身によって現在のガダルカナル紛争についての意見や考え方を表明できる場を構築する」[IFM 2000b] ことを目的として、2000 年 2 月に『タヴリ』の創刊号が刊行された [IFM 2000a]。

このような刊行の経緯や目的を踏まえれば、『タヴリ』はメディアや研究者

など外部者ではなく、IFM 自らが自らのことを語るための媒体といえる。IFM の実態をめぐっては依然として不明な点が多いとされるが〔石森 2016: 178〕、『タヴリ』は事実上、IFM の声を伝える唯一の公的なチャンネルといっても差し支えないだろう。そういう意味ではこれまでの先行研究の多くもその資料の大部分を二次資料に依拠しており、それは IFM の意に反することも考えられる。前節で概観した通り、先行研究において IFM はモロ運動の影響を受け、カスタム回帰主義的な性質をもつことが指摘されてきた。この点について『タヴリ』から何が読み取れるだろうか。以下では筆者が東タシンボコで収集したものを含む9本の『タヴリ』を対象に分析を行うことにする。

まず手始めに、カスタムというピジン語の用語に注目する。

しかしながら、肝心のカスタムという語は『タヴリ』において一度たりとも使用されていないことがわかる。そこで一般的にメラネシアの諸社会においてカスタムに類似すると考えられる伝統(tradition)あるいは伝統的(traditional)、さらに慣習(custom)などの概念にまで範囲を広げて検討してみる。なお、メラネシアの諸社会においてカスタム、伝統、慣習などはすべて意味合いが異なっており〔吉岡 2000〕、同一視できないことは承知の上で議論を進める。

伝統あるいは伝統的に関していえば、『タヴリ』において二か所のみ使用されている。それは、「IFM の目的 (Isatabu Freedom Movement Objectives)」が箇条書きで列挙されているところの、以下の部分である〔IFM 2000c〕(該当する語に筆者が下線を引く。以下同様とする)。

- ・ 伝統的な文化を復興させ、保護する。
- ・ 伝統的なチーフたち、ビッグマン、年長者たちと連携し、社会的調和の実現と社会問題の解決を目指す。

ここではたしかに伝統的な文化の復興が主張され、伝統的な政治的指導者であるチーフの重要性が指摘されているが、それらの内容が具体的に述べられることはなく上記のみが示されている。しかし、上記はソロモン諸島の文脈にお

いて取り立てて注目すべき内容ではないであろう。なぜなら、伝統的な文化やチーフの重要性はソロモン諸島の誰もが理解していることであり、ことさら主張するような内容ではないからである。すなわち、上記の内容のみであれば、それほど特別な意味は有さないといえる。

加えて、慣習（custom）については『タヴリ』において二か所みられる。いずれもガダルカナル島に固有の慣習に言及するものではない点で共通するが¹²、そのうちの一か所について紹介しておく [IFM 2000f]。

既存の土地法を改正することで、「我々の多様な規範、慣習、文化的な実践などに配慮し、他の州に住む市民が異なる州に属する土地を永続的に所有することを制限する」必要がある。

ここでは、土地所有に関する法律を改正するさいに慣習を含める必要性が主張されている。しかし、慣習の具体的な内容は示されておらず、ここで言及されているのはいわば慣習一般であり、ほかならないガダルカナル島に固有の伝統や慣習ではない。また、この文脈において力点が置かれているのは、他州の者によるガダルカナル島の土地所有を制限することにあるといえる。

以上、『タヴリ』におけるカスタム・伝統（的）・慣習などの言及箇所を検討したが、意外なほどにこれらの語は登場しないことがわかる。すなわち、IFMは先行研究者によってカスタム回帰運動とされてきたにもかかわらず、その公的な媒体においてカスタムおよびその類似概念への言及は数回にとどまっており、具体的な説明が付されることもない。筆者が入手した9本の『タヴリ』という制限はつくものの¹³、カスタム概念のもとでガダルカナル島の固有の伝統文化が主張される箇所は一か所も存在しないということになる。

4-2. IFMにおける「モロイズム」―土地とのつながりをめぐって

つぎに、IFMにおいてモロ運動を支えている教え、すなわち関根のいう「モロイズム」がどのように継承されているのか、『タヴリ』に基づいて検討する。

「モロイズム」を一言で表せば、イサタンブの土地や資源はイサタンブ島民が所有・管理するという考え方である。モロ運動において「モロイズム」はカスタム（とくにモロが開示した島の起源神話とイサタンブの歴史）と接合することによって正当化されるが、以下では差し当たってこの点は切り離して考えることとする。

『タヴリ』においても、土地とのつながりは繰り返し強調されている。毎号の巻頭に記される標語に「土地は我々の母であり、土地は我々の生命であり、土地は我々の将来である（Land is Our Mother, Land is Our Life, Land is Our Future）」とあることからわかるように、IFMにとって土地、すなわちイサタンブの重要性はいうまでもない。そして『タヴリ』ではイサタンブとの精神的なつながりを主張する語りが目に付く。たとえば、以下のような記述がIFMの司令官の手による「戦士の日記」として掲載されている[IFM 2000b]（以下の括弧内の記載は原文のままである）。

私の母であり、私の生命であり、私の将来であるイサタンブへ。私はガダルカナル（イサタンブ）の闘争、そして彼女の人々・彼女の所有物のために献身し、我々が彼女（イサタンブ）を活かすやり方を管理・制御するのに十分な力を得たいと思う。そこには幾多の困難と戦果があるだろう。しかし、我々の目的はイサタンブを永遠に解放することである。

『タヴリ』においてはイサタンブという語に度々言及され、それに関連する主義・主張が展開されることが多く、モロ運動への共感を読み取ることができる。また、ガダルカナルの土地すなわちイサタンブは我々の母であるという点を強調しながら、土地を自らの保護下に置くために、あるいは土地を解放するために外部勢力と戦うという表現は『タヴリ』で用いられる常套句である。

しかし、その一方で『タヴリ』においてモロ運動ないしペリセ・モロの名に明確に言及しながら彼らを賞賛したり、彼らに賛意を表明している箇所はない。

むしろモロ運動のカストムを批判したり、ペリセ・モロを揶揄する記述すらみられる。そこでは IFM の一部のメンバーが明らかにモロ運動のカストムとみなせるやり方を模倣し、それを他のメンバーに強要していることが記され、そのような動きを「我々の知的なエナジーをそのような超自然的な解決法やその検討」に向けるべきではないと否定し、自分たちは「政府による貧弱な開発政策こそを問題にすべきである」と述べられている。なお、同記事のタイトルは「民主的なキリスト教徒としての権利」であり、IFM 内において（キリスト教徒からみて）モロの伝統的・呪術的な行いを押し付けるような一部の動きを批判する内容となっている [IFM 2000e]。

『タヴリ』では、モロ運動とは相容れないキリスト教的価値観が表明されることも多々ある。一例として、上記の「戦士の日記」を締めくくる言葉を紹介する。それはモロ運動の参加者ではあれば決して口にしないであろう、以下の文言である [IFM 2000b]。

主イエス様、私に慈悲を与えて下さい。真実、忠誠心、愛、そして誠実さの道において私がすることを助け、私を導いて下さい。

この文言はキリスト教の神への祈りであり、カストムとは本来相容れない。なぜなら、一般的にメラネシアの諸社会でカストムと際立って対立する事象がキリスト教だからである（このことは、IFM 内のモロ運動的なカストム回帰を批判するさいに「民主的なキリスト教徒としての権利」という表現を用いた上述の記事からもうかがえる）。モロ運動において少なくとも表面的にはキリスト教は拒否されており、それがゆえに西洋人宣教団との諍いも生じている [Kabutaulaka 1990:48-50]。よって、モロ運動に参加するキリスト教徒の存在は否定しないが、それでもイロンガリやツイマオリを差し置いてキリスト教の神のみに全面的な服従を示すようなモロ運動の参加者は想定できないだろう。

以上のように、『タヴリ』におけるモロ運動の取り扱いに加えキリスト教への言及を踏まえば、IFM は「モロイズム」から影響を受けているとはいえ

るものの、モロ運動を継承していると結論付けることは難しい。

ところで、モロ運動において土地がカスタムと結びつき、土地にまつわる諸権利がカスタムによって正当化される理由は、創造主イロンガリがイサタンブとその人々を創造したという島の起源神話に起因していた。それでは、IFMにおいて島の起源などはどのように捉えられているのだろうか。IFMの主要リーダーの1人であり、オーストラリアの大学院教育を受けたとされる[Moore 2004:107] アンドリュー・テーは「土地は私にとって神聖である（第一部）」と題した記事において以下のように語っている [IFM 2000c]。

我々にとって、土地は究極的に我々の母である。彼女は我々をいつでも護ってくれる。そのお返しに、我々が彼女をしっかりと護らないといけない。彼女は神々が我々に与えてくれた最大の贈り物である。彼女は、父なる神、ヤハウエ、アツラー、ヴィシユヌ、バハー・ウツラー、ブッダ、イロンガリなどによって、我々に与えられた。土地はまさに我々の母にはかならない。

テーによれば、母なる土地は彼らが神々から与えられた最高の贈り物とされている。そしてその神々として列挙されるのは、ソロモン諸島の人々が一般的にイメージする世界の諸宗教において信仰される神たちの名前と、イロンガリである。興味深いことは、イサタンブの土地に関する諸権利を主張するためには（少なくともモロ運動においては）イロンガリへの言及だけで済むにもかかわらず、わざわざ世界の諸宗教の神々に言及している点である。また、イロンガリへの言及があるにもかかわらず、イロンガリと自分たちの固有のつながりも明確に語られることなく、その他の神々と並置されているに過ぎない。そこには自分たちと特定の土地との固有性・特殊性を希薄化させる一方で、「神々から与えられた母なる土地」の重要性についてより普遍的な視点から語ろうとする意図が見受けられる。

さらに、テーが同一記事内において上記の文章よりも前に記した文章をみれ

により明確にわかるだろう [IFM 2000c]。

今日、世界の至る所で人々は土地のために闘っている。…世界規模での趨勢として、多くの土着の人々、元来の土地所有者は、たんに日々を「生きること」から「サヴァイヴァル」へと変化しつつある。このような変化は元来の土地所有者が、国民国家の利益のための「開発」の名のもとに、周縁化されていることを示すのである。

テーに従えば、今日の世界的状況として国家が「開発」のために土着の人々の土地を侵害し、それが土着の人々の死活問題を引き起こしていることが示唆されている。ここでテーは、土地をめぐるガダルカナル島民の固有性・特殊性に訴えるのではなく、自らも世界で周縁化された人々と同じ境遇にあることを主張している。それがゆえに、上述の通り、自分たちとイロングリとのつながりを強調することなく、母なる土地という普遍的ともいえる表現を用いることで、自らを含む世界で周縁化されている人々にとっての土地の重要性を主張するという戦略をとるのである。

以下はテーの主張ではないが、自らを移住者によって土地の諸権利が脅かされている先住民の側に位置付けるような記述も『タヴリ』においてみられる [IFM 2000g]。

私はこれまでオーストラリアのアボリジニ、ニュージーランドのマオリ、アメリカ・インディアン、先住ハワイ人に起こったことを目撃してきた。ガダルカナルの人々は同じような方向に向かっていたところ、今この時に IFM が出現し、ガダルカナルの人々を救っているのだ。

以上のように、IFM の語り口は先住民にとっての土地を母なる存在とみなしてその普遍的な重要性を強調するものであり、彼ら自身も示唆する通り、それはガダルカナル島に固有の考え方ではない¹⁴。たとえばテーによれば（モロ

運動においてカスタムの源泉でもある）イロンガリは唯一の神ではなく、世界の神々の一人として扱われていた。このような主張の思想的背景に「モロイズム」があることは間違いないが、土地との関係を含むさまざまな事象をカスタムによって正当化しようとするモロ運動とは明らかに異なるといえる。IFMは「モロイズム」から影響を受けており、それがゆえにモロ運動に類似した動きにもみえるが、モロ運動の中心的なイデオロギーであるカスタム回帰主義を共有していないのである¹⁵。

ただし、そうであるなら、次のような疑問が浮上する。「モロイズム」からカスタムを差し引いたとすれば、後に何が残るのだろうか。あるいは、IFMが同時代の世界の周縁化された人々と共有しているものとはいったい何であろうか。

4-3. 考察—先住民と土着性

『タヴリ』においては、植民地政府、中央政府、企業、移民者など外部勢力の到来によって土着の人々や先住民（indigenous people）および元来の土地所有者（original land owner）の土地が脅かされているという主張が頻繁になされている。そのさい、土地をめぐる自らの正当性に関してカスタムおよび固有の伝統文化が持ち出されることが基本的にはないことは上述の通りである。端的に言えば、『タヴリ』において世界の他地域の事例も引きながら繰り返し示唆されるのは、先住者（先住民を含む）が先住者であるがゆえに有する特定の土地とのかけがいのない関係性、そしてその土地に対する権利である。以下ではそれを「土着性（autochthony）」と呼び、メラネシア地域を超えた世界的状況を踏まえてさらなる検討を加える。

近年、先住者が後からやってきた外部勢力や移住者を排除する動きが世界各地で顕在化するなか、とくに土着性の概念に注目しながら、グローバル化過程における土地に対する帰属や所有を議論する研究がみられる。土着性とは、ギリシャ語の古典的含意に基づけば「土から派生したもの」であるが、近年の用法に基づけばある土地の最初の居住者、あるいは土地の息子たちと考えるべき

であるという [Dunn 2009:113]。ある土地の所有、利用、居住などの諸権利はその土地への帰属を正当化する主張を不可避免的に伴っており、そのさいに正当化の論理として持ち出されるのが土着性であり、このパワフルかつ自明のものとしてのオーラをまとった土着性に基づいてよそ者が排除されるという [Geschiere and Jackson 2006:3-5; 慶田 2012:83-84]。

土着性に関する一連の議論において、土着性の自然化 (naturalisation) と、その空虚さ (emptiness) という2点が重要であろう。前者について、コマロフらは土着性の概念は特定の人々と特定の土地や空間との関係を換喩的に規定し、両者の関係を自然化するものであるという [Comaroff and Comaroff 2001]。すなわち、たとえば土地と母を同じ属性をもつものとみなし、生命を生み育てる存在としての土地を母とみなすことを自然な考え方とすることである。後者に関して、土着性とは、ある土地に最初にやってきたというだけであるために空虚さを特徴とし、コアになるものがないという。たとえばゲシーレらは民族性と比較しつつ、次のように述べている。「民族性の中心的な要素となるのは、集団の名前、特殊な歴史、そして固有の言語である。それに比して、土着性においてこのような要素はまったく必要ない。必要なのは、たんにそこに最初に到来したという主張だけである」 [Geschiere and Jackson 2006:5]。そして空虚さをもつがゆえに、土着性は、融通の利かない民族性とは異なり、状況変化にも機敏に対応することができる。

このような土着性の議論は、1990年代以降のアフリカやヨーロッパにおける社会運動および先住民運動等の分析を行うなかで、おもに植民地時代の抵抗運動とは異なる性質を読み取ろうとするものである。そこでは、グローバル化に抗して固有の伝統文化に回帰するのではなく、特定の伝統、歴史、言語などに規定されない人々が先住する土地に対する権利を主張する論理に迫ろうとする [Geschiere and Jackson 2006; Geschiere 2009]。というのも、首都近郊の居住区や多くの人々が行き交い利害関係が錯綜する場においてもはや民族性は断片化されて影響力を失いつつあるのであり、それよりも人々は互いに連携する社会的・空間的な範囲を変更しながら柔軟な主張を発しているからである。

そこにおいて運動およびその中心的な主張を正当化する論理は、民族性から土着性へと移行している。

以上の議論を踏まえれば、IFM において、どこかで聞いたことのあるような語り口で繰り返される母なる土地への賛美も理解可能であろう（実際、IFM による母なる土地の語りは、ソロモン諸島における大規模商業森林伐採を批判する NGO 団体の主張にも似ている [Hviding and Bayliss-Smith 2000:291-300]）。土地と母の関係を自然化し、そこに母から生み育てられた身体をもつ自らを投影することで、その土地に最初に到来したという歴史的な偶然性を自然的な必然性へと昇華させるような意味合いが喚起されることになる。こうして本来は空虚でコアになるものがない概念である土着性が、土地に対する権利を主張する正当性の基盤となる。IFM においても、このような形で土着性が発露しているといえるだろう。

ただし、IFM は民族性を強調する動きとは一線を画するものの、それを完全に欠落させているわけではない。そもそもイサタンブやイロンガリという名を積極的に用いること、そしてイサタンブ島民として1つに団結しようとする思考には、民族性が付着しているに相違ないからである。そう考えれば、IFM は固有の民族名や歴史と無縁ではなく、それがゆえに彼らの土着性はゲシーレらがいうほど空虚かつコアがないというわけではない。いわばIFM の『タヴリ』には、カスタムを前面に押し出さず自らの固有性・特殊性を抑制する一方、世界的に展開する先住民運動の趨勢も踏まえて先住者にとっての土着性という普遍性に訴える平衡感覚がみられるのである。

5. おわりに

本稿では、IFM 自らが作成したニュースレターに基づき、彼らの主張に耳を傾けてきた。その結果、IFM はかつてガダルカナル島で影響力を発揮したモロ運動の影響を受けているものの、同運動のようにカスタム回帰主義的とはいえないことが明らかとなった。また、世界的に先住者の土地に対する権利意識が高まるなか、IFM においてもそのような動きと歩調を合わせる形で、民

族性よりも土着性が強調される傾向を指摘した。それはまた、グローバル化に抗するのではなく、グローバル化された現在において自らと他者の境界を柔軟に引き直しながら、他者と折り合いをつける動きといえるだろう。

最後に、メラネシアの社会運動論に戻る。本稿では、IFM はカスタム回帰主義的ではないと指摘したが、これはやや異端の事例なのだろうか。というのも、冒頭で指摘した通り、既存の議論においてメラネシアの人々がカスタムを集団統合のシンボルとして客体化し、植民地政府および西洋人のやり方に対抗するという視点が広範にみられるからである。こうした視点は1980年代以降のメラネシア研究全般にも広く浸透し、たとえば国家独立期の政治的エリートが国民統合のシンボルとしてカスタムを創造したという議論 [Jolly and Thomas (eds.) 1992; White and Lindstrom (eds.) 1993]、すなわちカスタム論にも反映されている。つまり、とくに1980年代以降のメラネシア研究においては、カスタムの政治的・操作的な力に基づいて社会的集合性が説明されてきたといっても過言ではない。しかし、筆者はその一連の議論において具体的にどのような事象が実際にカスタムとして客体化されたのか、そしてそれらの事象を当事者はカスタムと認識しているのかなどについての検討が不十分であったと考えている。むしろ国家の政治的エリートが好んで主張し、その後に憲法や国歌で高らかに謳われたのはキリスト教の神であり、また神のもとでの団結ではなかっただろうか¹⁶。既存のメラネシアの社会運動論およびカスタム論に関しても、本稿で示したような批判的な視点から再検討する余地がある。

注

- 1 ガダルカナル革命軍 (GRA: Guadalcanal Revolutionary Army) からイサタンブ解放戦士 (IFF: Isatabu Freedom Fighters) と呼ばれるようになり、その後、IFM を名乗ったといわれているが [Moore 2004:106]、本稿では IFM に統一する。
- 2 アレンによれば、モロ運動は現在その運動参加者によって Gaena'alu Movement と呼ばれているが [Allen 2013:1, 105]、本稿ではモロ運動に統一する。
- 3 IFM の主要リーダーの多くはウェザーコースト地域出身であり、アンドリュー・

テーのほか、ハロルド・ケケ、そしてケケの兄弟であるジョセフ・サング、彼らの甥のジョージ・グレイの4名が挙げられる。なお、2000年10月のタウンズヴィル和平協定以降、テーと、ケケら3名に分かれて同地域における「部族的戦い」に発展する。分裂の要因として、テーはカスタム回帰主義的なモロ運動に共感する一方で、モダンを志向するケケらはそれを「モロカルト」などと呼び、反対したことにあるという。その後、ケケらはIFMから離脱してガダルカナル解放戦線（GLF: Guadalcanal Liberation Front）を名乗った[Fraenkel 2004:146; Allen 2013:103-107]。

- 4 1960年代に「カーゴカルト」について論じたワースレイやバリッジも、集団統合の達成こそがカーゴの到来を保証するとメラネシアの人々が考えていたことを指摘している[Worsley 1968:251; Burridge 1969:165]。ただし、彼らはその集団統合のシンボルがカスタムであるとは論じておらず、運動指導者が開示した新しい秩序に基づく統合を示唆している。新しい秩序とは、伝統的でも近代的でもない、いわゆる千年王国的な反構造状態におけるルールであり、身体所作である。集団統合のシンボルとしてのカスタムという捉え方は、1980年代以降の伝統文化の客体化論の隆盛と関連すると考えられる。
- 5 本稿のもととなる調査研究の一部は、科学研究費補助金（研究課題番号20406016, 23720422）により行われた。
- 6 イサタンブという名称は（スペイン人が命名したガダルカナル島という名称ではなく）モロが語った同島の起源神話に由来しており、モロ運動に積極的に関与する人々の間で用いられてきたという[関根 2002:79]。
- 7 ソロモン諸島の総陸地面積の約90パーセントは慣習地であり、残りの多くは政府地を中心とする譲渡地である。慣習地とはソロモン諸島民が伝統的に所有してきた土地であり、外部者に売却できない。一方、譲渡地とはおもに植民地時代に政府や入植者がソロモン諸島の人々から取得および接収した土地であり、現在その大部分は政府地となっている。
- 8 本稿の以下では、マライタ島からの移住者を便宜的にマライタ人と呼び、マライタ島で暮らすマライタ島民と区別する。

- 9 関根はカスタムと記述しているが、その意味内容は本稿でいうカスタムと同義と考えられるため、カスタムとして記すことにする。
- 10 タヴリ（*tavuli*）とはガダルカナル島南部の現地語で法螺貝を意味しており、IFM のメッセージが吹き鳴らされる法螺貝の音色のように、この土地に広く響き渡ることをイメージしている [IFM 2000d]。
- 11 たとえば「無理解な連中が暴れ回って紛争を起こしている」、「破壊的活動に興味をもつ者」、「犯罪的で何の思想をもたない無秩序の集団」、「若いトラブルメーカーたち。とくに何も考えず、一時的な楽しみと冒険を求めているだけ」などが挙げられる [Kabutaulaka 2001; Moore 2004:117-118; Braithwaite et al. 2010:24]。
- 12 もう一か所は、IFM と MEF は、武力的な衝突とともにラジオ通信を用いて互いに罵り合い、そのさいに「数多くの社会的タブーや慣習が侵害された」[IFM 2000i] という指摘である。
- 13 東タシンボコにおいて刊行済みの『タヴリ』は計 10 本であるという意見も聞かれたが、事実関係は不明である。ただし、先行研究者が指摘するように IFM にとってカスタムがモロ運動と同様に中心的なイデオロギーなのであれば、カスタムへの頻繁な言及があってもおかしくないであろう。にもかかわらず、筆者が入手した 9 本にはカスタムに明確に言及する箇所は皆無である。
- 14 土地を母とみなすことは土地が母系的に継承されてきたガダルカナル島のカスタムであるという解釈もあり得るが、少なくとも『タヴリ』においてはそのような示唆はみられない。むしろ『タヴリ』でみられるのは「母なる土地（mother land）」と「父なる神（God the Father, Papa God）」の対比である。
- 15 「モロイズム」的な土地や資源に対する考え方を「カスタムとみなすかどうか」は研究者による判断ではなく、当事者から発せられた声を頼りにするしかない。であるとすれば「IFM とは誰か」が問われることになる。しかし、IFM は全盛期には約 2 万人のメンバーを擁していたというが「1 つにまとまった組織ではなく、現状に不満を持つ複数の武装集団の連合体」[Braithwaite et al. 2010:24] であり、一枚岩的に語ることなどできない。また、『タヴリ』に関してもそれを作成したのは一部のエリートに限られるといえるかもしれない。本稿においては『タヴリ』

をおもな考察対象として扱うという資料的な限界を感じつつも、副題にもある通り「イサタンブ解放運動の一側面」を提示するものである。

- 16 なお、当事者たちがキリスト教をカスタムとして認識することはあり得るが、その場合、そのような認識に至る過程や背景などについて詳しく論じる必要があるだろう。

【参考文献】

Allan, C.H.

1989 *Customary Land Tenure in the British Solomon Islands Protectorate*. Report of the Special Lands Commission. Honiara: Western Pacific High Commission.

Allen, M.G.

2012 Land, Identity and Conflict in Guadalcanal, Solomon Islands. *Australian Geographer* 43(2):163-180.

2013 *Greed and Grievance: Ex-Militants' Perspectives on the Conflict in Solomon Islands, 1998-2003*. Honolulu: University of Hawai'i Press.

Bellam, M.E.P.

1970 The Colonial City: Honiara, A Pacific Islands Case Study. *Pacific Viewpoint* 11(1):66-96.

Braithwaite, J., S. Dinnen, M. Allen, V. Braithwaite and H. Charlesworth

2010 *Pillars and Shadows: Statebuilding as Peacebuilding in the Solomon Islands*. Canberra: ANU Epress.

Burridge, K.O.L.

1969 *New Heaven, New Earth: A Study of Millenarian Activities*. New York: Schocken Books.

Comaroff, J. and J. Comaroff

2001 Naturing the Nation: Aliens, Apocalypse, and the Postcolonial State. *Journal of Southern African Studies* 27(3):627-651.

Davenport, W.H. and G. Coker

1967 The Moro Movement of Guadalcanal, British Solomon Islands Protectorate.
The Journal of the Polynesian Society 76(2):123-175.

Dunn, K.C.

2009 Sons of the Soil and Contemporary State Making: Autochthony,
Uncertainty and Political Violence in Africa. *Third World Quarterly* 30(1):113-127.

Fraenkel, J.

2004 *The Manipulation of Custom: From Uprising to Intervention in the Solomon Islands*.
Wellington: Victoria University Press.

Geschiere, P.

2009 *The Perils of Belonging: Autochthony, Citizenship, and Exclusion in Africa & Europe*. Chicago/London: The University of Chicago Press.

Geschiere, P. and S. Jackson

2006 Autochthony and the Crisis of Citizenship: Democratization,
Decentralization, and the Politics of Belonging. *African Studies Review* 49(2):1-7.

Hviding, E. and T. Bayliss-Smith

2000 *Islands of Rainforest: Agroforestry, Logging and Eco-tourism in Solomon Islands*.
Burlington: Ashgate Publishing Ltd.

IFM (Isatabu Freedom Movement)

2000a *Isatabu Tavuli: The Isatabu Freedom Movement Newsletter*. 10 February 2000,
Volume 1, Number 1.

2000b *Isatabu Tavuli: The Isatabu Freedom Movement Newsletter*. 18 February 2000,
Volume 1, Number 2.

2000c *Isatabu Tavuli: The Isatabu Freedom Movement Newsletter*. 2 March 2000,
Volume 1, Number 4.

2000d *Isatabu Tavuli: The Isatabu Freedom Movement Newsletter*. Volume 1, Number
5.

2000e *Isatabu Tavuli: The Isatabu Freedom Movement Newsletter*. 7 April 2000,
Volume 1, Number 6.

2000f *Isatabu Tavuli: The Isatabu Freedom Movement Newsletter*. 19 April 2000, Volume 1, Number 7.

2000g *Isatabu Tavuli: The Isatabu Freedom Movement Newsletter*. 6 June 2000, Volume 1, Number 9.

2000h *Isatabu Tavuli: The Isatabu Freedom Movement Newsletter*. 14 June, 2000, Volume 2, Number 1(1).

2000i *Isatabu Tavuli: The Isatabu Freedom Movement Newsletter*. 14 June 2000, Volume 2, Number 1(2).

石森大知

2013 「ソロモン諸島の「民族紛争」と現代的諸問題」、丹羽典生・石森大知編『〈紛争〉社会のフィールドから考える—オセアニア現代への接近』昭和堂、pp.99-122。

2016 「紛争下の日常を生きる人々—ソロモン諸島ガダルカナル島北東部における紛争経験」丹羽典生編『〈紛争〉の比較民族誌—グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱』春風社、pp.171-204。

Jolly, M. and N. Thomas (eds.)

1992 *The Politics of Tradition in the Pacific*. (special issue) *Oceania* 62(4).

Kabutaulaka, T.T.

1990 A Socio-political Pressure Group : A Study of the Moro Movement of Guadalcanal. *O'o: A Journal of Solomon Islands Studies* 2(2):42-62.

1998 *Pacific Islands Stakeholder Participation in Development : Solomon Islands*. A Report for the World Bank. Washington: The World Bank.

2001 Beyond Ethnicity: The Political Economy of the Guadalcanal Crisis in Solomon Islands, Working Paper 01/01, *State, Society and Governance in Melanesia Project*. Canberra: Australian National University.

2008 Westminster Meets Solomons in the Honiara riots. In Dinnen, S. and S. Firth (eds.), *Politics and State Building in Solomon Islands*. Canberra: ANU Press, pp.96-118.

Keesing, R.

1992 *Custom and Confrontation: The Kwaio Struggle for Cultural Autonomy*. Chicago: University of Chicago Press.

慶田勝彦

2012 「キベラ・レッスンケニアにおける土着性とヌビのアイデンティティ」太田好信編『政治的アイデンティティの人類学—21世紀の権力変容と民主化にむけて』昭和堂、pp.78-103。

宮内泰介

2011 『開発と生活戦略の民族誌—ソロモン諸島アノケロ村の自然・移住・紛争』新曜社。

Moore, C.

2004 *Happy Isles In Crisis: The Historical Causes for a Failing State in Solomon Islands, 1998-2004*. Canberra: Asia Pacific Press.

Otto, T.

1992 The Paliau Movement in Manus and the Objectification of Tradition. *History and Anthropology* 5:427-454.

関根久雄

2002 「「辺境」の抵抗—ソロモン諸島ガダルカナル島における「民族紛争」が意味するもの」『地域研究論集』4(1):63-86。

SIG (Solomon Islands Government)

2000 *Report on 1999 Population and Housing Census: Basic Tables and Census Description*. Honiara: Solomon Islands Government.

White, G. and L. Lindstrom (eds.)

1993 *Custom Today*. (special issue) *Anthropological Forum* 6(4).

Worsley, P.

1968 *The Trumpet Shall Sound: A Study of 'Cargo' Cults in Melanesia*. New York: Schocken Books.

吉岡政徳

2000 「カスタムとカスタム—オセアニアにおける伝統概念研究の批判的考察」須藤健一編『オセアニアの国家統合と国民文化』JCAS 連携研究成果報告 2、pp.143-182。

From Ethnicity to Autochthony:
One Aspect of the Isatabu Freedom Movement in the Conflict, Solomon Islands
Daichi ISHIMORI

From 1998 to 2003, the people of the Solomon Islands experienced a big conflict called Ethnic Tension or Guadalcanal Crisis. The violence began in late 1998 when a militia group from Guadalcanal began attacking people from the nearby island of Malaita who had settled in the north part of Guadalcanal. This paper focuses on the claims of the Guadalcanal-based Isatabu Freedom Movement (IFM) and considers their logic that justifies the relationship with their land. In previous studies, it has been pointed out that IFM is strongly influenced by *kastom*-oriented Moro movement. *Kastom* is a word from Solomon Islands Pidgin, which means traditional culture. Certainly, IFM is thought to be influenced by the movement. This is because the name Isatabu Freedom Movement shows sympathy for Moro movement, and some of their participants are motivated and inspired by it. However, the IFM official newsletter *Isatabu Tavuri* shows that they do not necessarily emphasize their unique *kastom* and traditional culture. Rather, in this newsletter, by using the universal and natural expression about the relationship with land, they insist on the importance of land for the marginalized people in the world, including themselves.

Keywords: autochthony, Isatabu Freedom Movement, *kastom*, “Moroism”, Ethnic Tension, Solomon Islands

キーワード：土着性、イサタンブ解放運動、カストム、「モロイズム」、エスニック・テンション、ソロモン諸島